

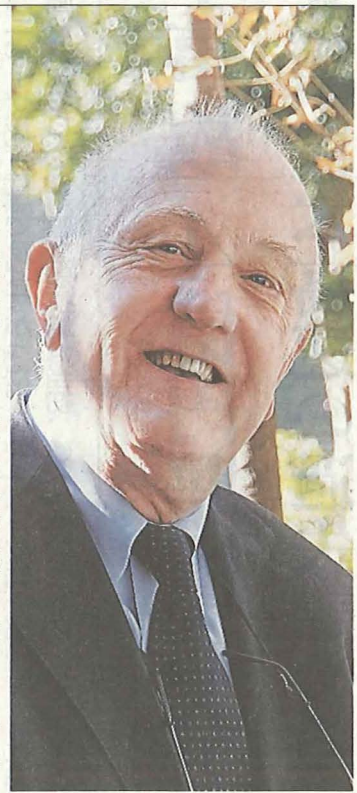
ひと

自身の名前を冠した日本学賞ができた

Josef

Kreiner

ヨーゼフ・クライナー さん (75)



海外の若手日本研究者を対象とする、自身の名前を冠した賞ができた。第1回の受賞者はイタリアの琉球史研究者に決まり、贈呈式が今月あった。

「とても名誉なことですが、私は何もしていないのですよ」。祖国オーストリアの首都ウィーンの博物館で日本文化に初めて出会ってから57年。謙遜の仕方まで、まったく違和感のない日本流だ。

「魏志倭人伝」を教科書にして学び始め、21歳で東京大学に留学した。民俗学者の柳田国男を訪ねると、奄美の研究を勧められた。離島で人々の話を聞き、暮らしかや信仰に目を凝らし、全国各地へと研究フィールドは広がった。

西ドイツ政府が1988年、東

京に日本研究所を設けると所長となり8年務めた。「日本の産業や社会が抱える問題は欧州と類似点が多いと気付き、生まれ育った欧州が見えてきました。日本と欧州は互いを映す鏡。多様な視点から立体的に見つめることが大切です」

賞を制定した法政大には10年前に招かれ、欧州の博物館に残る日本美術の調査などを手がけた。ボン大学名誉教授だが、妻弘美さんの郷里熊本に暮らす。

気になるのは沖縄の現在。「日本は単一民族で単一文化だという思いが強いようですが、実に多様です。沖縄の文化や価値観などを、本土の人たちがもっと知ることが必要なのではないのでしょうか」

文・写真 渡辺延志